入選

# 水を守ること＝知ること

滋賀県　彦根市立南中学校
三年　岡氏　琴野

私は小学2年生の夏休み、「水道の水はどこからくるのかな」という自由研究をしました。当時私は千葉県船橋市に住んでいました。近くには川がありましたが、ザリガニぐらいしか住んでいない汚れた川しかなく、どこの水を使っているのか不思議だったからです。船橋市の水道は、水源から家の蛇口に来るまで約４０キロ、３日間もかかることが分かりました。水源の水もあまり美しくないのに加えて、これだけの距離と日数がかかるため、多くの薬を使用しなければいけません。なので、多くのパイプとパイプをつたって来た水道の水はあまり飲んではいけないものだと思っていて、水はごくたまにしか飲みませんでした。自由研究を通して、蛇口から出てくる水は多くの方々の努力のもと、とても美しい水になっていることが分かりました。それでもやはり蛇口から出てくる水をゴクゴクと飲むのには少し抵抗がありました。

小学3年生になり、彦根市に住み始めました。彦根に来て驚いたこと、それはいつでも上を見ると、とても大きくきれいで雄大な空が広がっていること。空気がとてもきれいで車が多いところでものどが痛くならないこと。車で遠いところまで行き、やっとかごの中にいるのを見ることができたホタルが普通に近所の川にいること。橋の上からでも、魚の様子、川の底がくっきり見えるほど水が澄んでいること。それから、名水百選にも選ばれるわき水があり、そのままで飲むことができ、またそれがとてもおいしいことです。

なぜ水がこんなにもきれいで澄んでいておいしいのか、水源はどこなのか、どれだけきれいな水源なんだろうと気になり、八坂町の浄水場の見学に行ってみました。そこで、水源はすぐそこの琵琶湖やわき水であることを知りました。水源がとても近く、その日のうちに家の蛇口まで水が来ることに驚きました。みんな琵琶湖の水が水源だと知っていて、いつも琵琶湖を目にするせいか、滋賀の人は大人も子どもも琵琶湖をきれいにしようとしています。千葉は、きれいにしようと呼びかけているものの実際住民全員参加で清掃活動を行っているのをあまり見たことがありません。

しかし滋賀へ来てからは、ＦＭラジオ主催の湖岸清掃活動があり、滋賀の人だけでなく遠くからもたくさんの人が参加していたり、自治会で住民全員で川掃除をしたり、琵琶湖を守るための法律があったりと、みんな水をきれいにしようとする意識が高いことを知りました。そして琵琶湖がきれいなのは、自然が多くあって空気がきれいだから水もきれいとかじゃなく、みんなが大阪や京都の人々も使用する水だからと責任や誇りを持ち、琵琶湖をきれいに保とうと努力している成果だと思います。

私は彦根に住んで、もっとたくさんの人に滋賀の人々が頑張って琵琶湖を守っているということを知ってほしいと思うようになりました。滋賀の人々がどんなに琵琶湖を守ろうとしているのか、琵琶湖のために動いているのか、そしてその結果、今の琵琶湖があるということをもっと知ってほしいです。そして日本中の人々がもっと滋賀の人のように水や水源を大切にしてくれるようになったらいいなあと思います。小さな力ではありますが、私も何か役立つことがないか考えていくつもりです。

入選

# 水との距離

滋賀県　守山市立守山中学校
三年　山岡　莉沙

私は、滋賀県に住んでいます。滋賀県は、とてもよい町で、たくさんの自慢があります。その中でも、琵琶湖が一番の自慢です。そのわけは、やはり日本一だからです。そして、琵琶湖の水を使って、私たちは生活しています。だから、日本一の湖を持つ滋賀県民は日本一水を大切にする県民であるべきだと思います。

先日、私は修学旅行で、沖縄の伊江島という島に行き、民泊をしてきました。ホストファミリーのお母さんもお父さんもとても優しかったです。お母さんが作ってくれるご飯も本当に美味しくて、何も不自由なく過ごせました。

でも、生活するうえでの自然環境は、滋賀県と全くかわらないということはありません。最も大きな違いは、水との距離です。伊江島には、川がひとつもありません。そのため貯めてある雨水が生活用水となります。その雨水がなくなってしまえば、トイレも流せません。お皿も洗えなくなり、お風呂にもはいれなくなります。そういったことから民泊初日のオリエンテーションでは、お風呂は長く入りすぎないようにとい願いがありました。生活する水に限りがあること、それは琵琶湖という大きな水がめがある滋賀県ではありえないことでした。

そのとき、ある言葉を思いだしました。「お風呂ぐらいゆっくり入りなさいよ」…。この言葉は私の周りでは良く聞く、疲れている人を気遣う言葉です。今までは、人の心に休息を促す良い言葉だと思っていました。しかし、伊江島で民泊をしてから、この言葉に少し、違和感を感じるようになってきました。

伊江島では、お風呂に長く入って、たくさんの水を使ってしまえば、たいへんなことになります。生活に使う水がなくなってしまいます。

「お風呂ぐらいゆっくりはいりなさいよ」。この言葉は、豊かな水環境が整って初めて使うことができる言葉だったのだと、伊江島での生活を経験し、気付くことができました。

伊江島での民泊の間、水を使いすぎないように十分気をつけて過ごしたつもりでしたが、私たちが民泊をした後、伊江島の人たちの生活水がなくなってしまったと聞きました。申し訳ない気持ちと共に、それは水道の蛇口をひねって水が出てこなくなるという経験がない私には、想像もつかないことでした。それに加えて、水のない状況をどのように切り抜けたらいいのでしょう。水がない生活に到底耐えられるわけもなく、そして、その答えを見つけられず途方に暮れてしまうことになるでしょう。伊江島の人たちはどうしたのだろうと心配していたら、伊江島の人たちの答えは、すごく自然なものでした。「次の雨が降るまで待ちましょう。」と。それは、自然と共存している姿でした。

水との距離、それは測れるものではありません。だから、ものさしでも、巻き尺でも測れません。でも、感じてほしいのです。水との距離を常に感じながら生活をする。そうすると、私の水との距離の感じ方は、近すぎたのだと気づきました。気付くことで、自分の水の使い方を改めることができました。

みなさんはどうですか。水との距離を感じられていますか。今一度、水との距離を感じてみてほしいです。

入選

# 伝統工芸を支えるもの

京都府　京都学園中学校
三年　辻　晏奈

今は亡父の定期入れに入っていた一枚の写真。五歳の私が、当時流行のキャラクターの衣装を身にまとい、玉付きの自転車にまたがり、そして、唯一咲いていた桜と一緒に写っていた。天神川は、春になると桜並木がとても綺麗で、多くの人が毎年訪れている。私はあの頃も今も、一本の桜の木に特別な感情を抱いている。約一週間早く、他の桜より、誇らしげに花を咲かせる力強い木。五歳の私も、一目見ようと、父と一緒に訪れた。小学校へ入学した時も、卒業した時も、そして父が亡くなった年の春も、必ずその木は桜を満開にしていた。中学三年生になった今では、あの桜が咲くのは、生きる強さと水の助けがあるからだと理解できる。

祖父と亡き父は四季折折の素晴らしい花を描く職人である。それを支えているのは京都の綺麗な水だ。

京友禅染は、古来から有名な伝統工芸の一つである。二十六工程の中の「友禅流し」は、現在は夏の風物詩と呼ばれ、観光客に親しまれている。明治時代から昭和三十年までは、三条と四条大橋の間の鴨川や堀川で、職人が色鮮やかな反物を川に向かって投げると、水しぶきを上げて水面にゆれるという幻想的な光景が繰り広げられていた。これをする事により、京友禅染の工程の一つ、布につけた糊を落とすことが出来ていた。

しかし、たくさんの色鮮やかな鯉が舞っているようだと評判になった反面、河川の水質汚染につながるという短所が出てきてしまった。昭和五十二年頃になると、友禅流しで落とす糊が、化学染料で石油が使われている為、生物に有害で、汚い水でも住めるフナまでもが住めなくなった。ホタルも姿を消した。

京友禅には、綺麗で良質な水が、友禅流しの他、「蒸し」と呼ばれる工程でも不可欠で、水質で色が微妙に違ってくる為、仕上がりに大きな影響が出てしまう。そこで人々は、伝統工芸も川も守りたいという思いで、良質な水が必要な場合は、地下水をポンプでくみ上げ、擬似的な川を作ってその水を使うという画期的な方法を生み出した。そうする事により、川は綺麗になり、着物の仕上がりも以前と同じようになる。その結果、平成十五年には、フナはもちろん、アユやイワナが住める程の川になった。

このように、伝統工芸の京友禅は、京都の水によって、守られ、支えられている。それだけではなく、有名な湯葉や、豆腐、伏見の酒も、水が無ければ成り立たない。千宗室（裏千家家元）の言葉に、「水のきれいなところは、文化が育つところなんです。京都は鴨川の流れのもとに育ちました。湯葉、豆腐、野菜など、京都の食材がおいしいのはやはり水なんです。」というのがある。友禅を始めとするさまざまな伝統工芸が京都で発展したのは、まぎれもなく、京都の美しい水の存在のおかげだ。

水質を落とす事は、もちろん私達の生活に影響が出るが、古くから受け継がれてきた世界に誇る伝統工芸も、京都の文化も汚す事と同じ。水は、人間だけではなく、地球を守っているんだと改めて実感した。全ては水によって成り立つ運命共同体。

あの一枚の写真には、父のたっぷりの愛情そして、力強い桜を支える水の底力が溢れている。なぜ父がたくさんある中であの写真を大切にしていたのか。きっと、自分が守れなかった、受け継ぐ事が出来なかった京友禅を、もっと色々な場所で伝えてほしい。そんな願いが込められているのだろう。だからこれからも、私は発信し続ける。自分なりの方法で。伝統工芸を支えている大きな存在、水。水の大切さをもっと知り、知ってもらう為に、私自身の足でゆっくり力強く歩いていく。

# 入選

## 水の世界

京都府　京都学園中学校
一年　中村　葵子

「お母さん、水出ぇへん。」

朝、学校に行く準備をしている時、顔を洗おうと蛇口をひねるといつも出てくるはずの水が出てこなかった。どこの蛇口をひねってもトイレのレバーを押しても、水が出てくる気配はなかった。マンションのタンクが故障したらしく、数時間水が出ないらしい。ビックリして、どうしようと頭が混乱したけど、戸惑っている時間もなかったのでとにかく母の指示に従い、冷蔵庫にある飲み水を使い顔を洗ったり、トイレの水のかわりに流したりと三人の朝の準備でこんなに汗をかき一生懸命になるのは初めてだった。学校に行き、帰ってくると水が出るようになっていた。私は、今までに感じたことのないくらい大きな安堵の気持ちを覚えた。その日、水の力の偉大さや、重要性を思い知らされた。

六年生の頃、社会見学で天龍寺の住職さんにお話を聞く機会があった。住職の小川さんが何回も何回も繰り返し言い、私の心の中に響いた言葉がある。

「当たり前はこの世界には存在しない。だからこそ何にでも感謝の気持ちを持たなければならない。」

自分が生きていること、育ててもらえていること、信頼してもらえること。その全てが当たり前ではなく、感謝しなければならないのだ。それは水も同じである。日本のように水道水が飲める程きれいな国の都市は、世界に十一都市しかない。また生活に必要分の水が手に入らない人は、世界で九億人弱もいる。それに、汚い水が原因で死亡する子供は五人に一人の割合で存在する。テレビで幼くして苦しんでいる姿に、悲しさやむごさを感じると同時に、彼らのかすかな希望を抱いている瞳は、無条件に勇気と感動を与えてくれた。それに対して私達は水に関してそれほど不自由をしていない。私達が暮らしやすいように生活しやすいように、働き努力してくださっている人達がいるからだ。一番身近な所で言うと水道水。日本では７つの工程を経て私達のもとに届き、４つの工程で川にもどされていく。ていねいな仕事をしてくださっている人達に感謝したい。

「水」というものはどのような印象なのだろうか。ある者にとっては「身近なもの」であり、ある者にとっては「手が届かないもの」であろう。この水の格差を私達は必ずうめなければならない。人だけではなく、絶滅危惧種が多くなっている動物や、水の力で花や実を育てる植物、すべての命あるものに、キレイな水を分け与えなければならない。そのために何が私達に出来るだろうか。今すぐ行動することも大切だと思うが、まずは、水に対して正しい理解と自分の意見を持つことが肝心だと私は思う。そしてそこから自分が無理なく継続できる方法で、一人ずつが行動していけば、良い方向に変わっていくのではないだろうか。例えば、川のゴミを拾って正しい場所に捨て直す。こうすれば川の水がきれいになり、魚や微生物がせいそくしやすくなる。また、洗濯をする際に、日本中がすすぎ一回にすると、約八ヶ月半で二億トンの水を貯蔵する黒部ダムの量が節水できる。このように一人がすることは小さくても、みんながやればつもりにつもって大きな力になる。だからこそ自分に出来ることを真剣に考えなければならない。

私は、これからゴミ拾い、募金、節水などをして、少しでも水の環境づくりにこうけんしていきたいと思う。当たり前がないから、未来は変化する。だからこそ、希望を持ち努力しなければならないのだ。水を通して、世界中の人々が手を取り合い、幸せに生活できたり、人や動物、植物などの命ある全ての者が互いに認め合い、共生できると信じて努力しよう。そして希望に満ち溢れる世界を私は作りたい。

入選

# 私たちの水

大阪府　大阪教育大学附属池田中学校
一年　福田　菜月

私の住んでいる尼崎市には浄水場があります。浄水場とは川の水をきれいにして生活の中で飲めるようにするところです。尼崎市の浄水場は琵琶湖から流れてくる淀川から水をひいています。

私は四年生の時にこの浄水場に社会見学で来たことがあります。浄水場では川の水をきれいにするため少し薬を入れるそうです。雨が降ったり、川の水が汚れたりすると薬をいつもより多く入れなければいけません。薬は少なければ少ない程気持ちがいいです。そのためには川が汚れないようにすることが一番です。

また、四年生の時の社会見学では下水場にも行きました。下水場は家庭、工場などで出た排水をきれいにして川に戻すためにある施設です。下水場も浄水場と同じく排水は元々きれいな方が楽に戻せるのでできるだけ油、ゴミなどを含む排水は流さない方がいいです。では、なるべくそのような排水を出さないようにするにはどうすれば良いでしょうか。例えば、油のついた食器は洗う前に着れなくなった古い服でふいたり、ゴミは一つにまとめて流さずに捨てたりとできます。少しの工夫で自分にも自然にも優しくなれます。

ところで、尼崎市には小さな川がいくつもあります。私の住んでいる家の近所にも川はありますが、その川は底も見えない程にごっていて缶やペットボトル、ビニル袋などのゴミがあふれています。その光景を見る度に私は嫌な気持ちになります。そんな時、父は私にこんな話を教えてくれました。

同じ尼崎市には庄下川という川があります。その川は昔、近所の川と一緒でとてもきたなかったそうです。しかし、庄下川にはコイが泳いでいました。すると、川沿いに住んでいた人たちが生き物が住んでいるのに汚していくのはおかしいと立ち上がりました。そして、川にコスモスなどの植物を植えて川には生き物がいるから川を汚すのは同じ生き物を苦しめているということなんだと思えるような環境にしました。また、川に落ちているゴミも拾いました。すると、今までできたなかった庄下川はゴミを捨てる人が減り、どんどんきれいになっていきました。そして最近では川がすきとおっている自然な川になりました。

この話を聞いた時私はおどろきました。自分がゴミを捨てて汚していった川ではないのに、このままではいけないと考えて意見として終わらせずに行動に移して、自らの手で自然を取り戻したからです。私も近所の川は汚れていておかしいとは思いました。しかし、それを考えだけで終わらしてしまったので、その川はまだきたないままです。自分が汚していなくても私たちの水、私たちの川なのだから、豊かな自然を取り戻すために動き出さないといけないと思いました。

このような川や海をきれいにする取り組みは全国に広がっています。この取り組みを続けることで日本の自然は取り戻されていくでしょう。そして、テレビのニュースなどで中国やインドなどアジアのこれから発展する地域に伝わってそこの自然も元通りになれば、またそれらを通じて世界各国に取り組みが広がるでしょう。それからもっと取り組みを進めてこの先続けていくことで、ある地域だけでなく世界の国々、地球の水、地球の環境が守られると私は思います。

入選

# 世界の水と日本

広島県　広島市立城山北中学校
三年　瀬川　菜々子

私は、ある写真が心に残っている。それはある国の少女が水をたっぷり入れた瓶を頭に乗せている写真だ。周りは殺風景だが、その少女がカメラを見つめるまなざしは強かった。何か訴えかけているような真剣さと、どこか悲しげにも見える目だった。

それから私は、世界の水と日本の関わりに関心がわいた。いろいろ調べてみると驚きの事実ばかりだった。十二億人もの人々が未だに安全な飲料水を確保できていないこと。開発途上国における疾病原因の八十パーセントが汚水によるものであることなどだ。日本にいると蛇口から出る水は心配なく、毎日のように利用できる。それが当たり前のように思ってしまう。水で困る国があるのは私達にとって現実味がわかないのだ。さらに調べを進めていくと、ある言葉に興味を持った。それは、ロンドン大学の教授が紹介した「バーチャルウォーター」だ。難しい考え方かと思ったが，結局は日本が海外から食料を輸入している分だけ水も輸入していることになるわけだ。確かに、そう考えると日本は大量に食料を輸入することでその生産に必要な分だけの自国の水を使わないで済んでいる。外国から食料だけでなく、目に見えない形で水をもらっていた。だから、外国で起きる水問題は他人事ではなく、身近な事に感じられた。水質汚染や、水不足の国があるのだから、日本だっていつその事態に陥るか分からない。日頃、支えてもらっている外国のどんな水問題も共に乗り越える方法を探さないといけないなと実感した。今日の食卓に並ぶ食事だって世界の水があるからこそだ。この「バーチャルウォーター」の概念を知ってから、私は世界の水が大きな存在に感じられるようになった。やはり、地球は一つで水が生きる星であり、世界各地は水でつながっているのだなと思う。

また、水は人間の行動によって姿を変える生き物のように思える。人間が経済発展を目指すばかりだと、水質汚染を起こし悪い姿に変わり、人間に仕返しをする。人間が水を分け合い、ごみを捨てたりせず、優しく扱えば作物を豊かにし、美しい良い姿に変わる。人間に恵みをもたらしてくれる。そんな二つの顔を合わせ持つ、生き物だと感じる。

なかには、六十億の人口の中でたった一人自分が水質汚染対策をしても意味がないと考える人がいるかもしれない。世界の水について考えたり、水を大切にしても何も変わらないと思うかもしれない。けれど、私は思う。勉強のように小さな毎日の取り組みの積み重ねが最終的に実を結ぶのではないか。小さな事、例えば食事を残さず食べることを心がければよい。そんな簡単な事で外国の水をむだにしないで済む、少しは世界を大切にできると思う。

私は今回、水の大きな役割、外国との関わりについて知ることができた。小さなことの一つ一つが何十年、何百年後、未来の人達の水が生きる土台になるよう取り組んでいきたい。あの写真の少女のような目をした子供達が笑顔になる世界を願って。

入選

# 限りある大切な資源

山口県　山口県立高森みどり中学校
二年　上田　幸平

昨年の夏、国連より「ソマリア南部二地域に飢餓宣言」が発表されました。過去六十年で最悪の干ばつに見舞われ、推定三百七十万人が餓死の危機に直面し、食糧や水を求めてひどい健康状態で三百キロ歩いて難民キャンプにたどり着いたソマリア難民の姿を目にし、遠い国の出来事だが、緊迫した様子がテレビから感じとれたのを今でも思い出します。

僕は今、家の近くを流れる「切戸川の水質調査とプランクトン調べ」を夏休みの理科の自由研究の課題にし、三年間、この課題に取り組んでいます。

我が市の下水道人口普及率は七十六・三％で、下水道が整備されていない地域から切戸川に流れてくる、生活排水や田畑からの汚水は、植物などの自然浄化作用により、現在、「少し汚れている」を維持しています。河川水に生活排水である、米のとぎ汁と薄めた台所用洗剤をそれぞれに入れ、プランクトンの様子を実験観測したところ、生活排水は富栄養なため、日光が当たっているところでは植物プランクトンが増え、その後、バクテリアが発生し、それを繊毛虫が食べ、浄化され、きれいな水になりました。

かつてのように、合成洗剤に含まれるリンが多量に河川に流れ込むことは少なくなっていますが、「微生物によって環境中に残らない、微生物をうまく利用した製品」の開発に驚かされます。

また現在では、環境に優しい無洗米や、すすぎ一回でよい洗濯洗剤の開発も進み、我々の選択一つで生活排水の少水量化から、かなりの節水が可能となってきました。下水道不整備地域から出る生活排水は、川に流れ、川の水の一部は浄水場へ。下水道整備地域から出る生活排水は、下水道管を通り、下水処理場へと流れていきますが、我々が地球に優しい製品を選択し使用することで、環境に優しいだけでなく処理施設の処理能力の負担軽減にもつながります。

一方、使用済みの油をそのまま生活排水として流したり、高濃度の洗剤または酸、アルカリ性の強い溶液をそのまま生活排水として流してしまうと、プランクトンは弱り、生き物が住みにくい環境になり、バランスのとれた環境を保つことができなくなってしまいます。

僕が小学四年生から所属しているエコクラブでは、地球温暖化防止、自然保護や生物多様性、循環型社会等様々な環境課題に取り組んでいます。そこでエコクッキングなどの実習も行われます。実習中、野菜や食器を洗っていると、「無駄な水は使わない。」「水を出しっぱなしにしない。」と、再三、先生から指導を受けます。頭では、「水は大切」とわかっていても、行動が伴っていないのでしょう。このように、一人一人が節水に気づき、エコ精神が身に付き、エコの環が広がることで、数々の無駄が省け、しいては節水、物のありがたさをも実感できていくのではないでしょうか。

世界はいま、地球温暖化、貧困、食糧、水資源の不均衡、教育格差、地域紛争など、地球規模の課題が山積みです。今、我々日本人は、世界の現実に目を向け、無駄を省き、エコに取り組み、物の恵みに感謝すべき時がやってきているのではないでしょうか。

地球温暖化がさけばれるなか、生物の生命にとって必要不可欠な水。限りある大切な資源、みんなの手で守り続けていこうではありませんか。

入選

# 水と未来

徳島県　神山町立神山東中学校
二年　東浦　瑞歩

私の住んでいる団地の前には川があります。鮎喰川というとてもキレイな川です。しかし、時々ゴミが捨てられているのを目にします。夏になると、川に来てバーベキューをした人が使った紙コップやおはし、金網が捨てられているのを毎日のように目にします。

そんな川を見て私はふと思うのです。「ゴミ捨てのせいで水が汚れて、人間が生活をするために必要な水が使えなくなるとどうなるのだろう」と。

私は人間が生活をするために必要な水がなくなると人類は滅亡するだろうと思います。

なぜなら、人間は水がなければ生きてゆけないからです。人間の体重の六十～八十パーセントは水分です。体の中の水分は生命を保つために重要な役割を果たしています。そんな体の中の水分がなくなるとどうでしょう。人間は確実に死んでしまいます。そんな大切な水を私たち人間は汚しているのです。

でも、私は汚しているのが人間ならばキレイにできるのも人間だと思います。

水はゴミによるもの以外でもいろいろな場面で汚染されています。

例えば、食事をして残った残飯などによる汚れです。四十ミリリットルのてんぷら油を川にそのまま流すと、うすめて魚が住めるようにするには、なんと一万二千リットルもの水が必要になります。油以外でも、牛乳二百ミリリットルを水でうすめて魚が住めるようにするには、二千八百リットルもの水が必要になります。

このことから、私たちの普段の生活の中で水を汚さないですむ方法はいくらでもあることがわかります。例えば、あたりまえのことですがゴミを捨てないようにしたり、残飯を出さないように心がけたりとたくさんの方法があります。私のオススメする方法は、フライパンや食器などの汚れをいらなくなった布や新聞紙でふきとってから洗うことです。こうすることによって、流れていく油などの汚れを少なくしたり、洗剤を使う量を減らしたりすることができます。

このように毎日の生活に少し工夫をするだけで、大切な水を汚さないですみます。だから私は、一人でも多くの人に水を汚さないですむ工夫をしてもらいたいです。

一人がたくさんの工夫をしなくてもかまいません。多くの人が少しの工夫をすればいいのです。それだけで、大切な水が汚されずにすむのです。私の住む神山町にはアドプト活動という道路清掃活動があります。道路の一定区間をいろいろな企業が責任をもって清掃するというものです。同じように一人ひとりが責任をもって、美しい水を守ることを考えるべきだと思います。また、アドプト活動では「ゴミを拾う人を育てるよりも、ゴミを捨てない人を育てなければいけない。」と教わりました。水の問題についても、水を汚さない人をたくさん育てなければならないと思います。そのことを多くの人に知ってもらえれば、未来が変わると私は思います。

水は生きている者、すべての大切な財産です。その財産をみんなで守っていこうではないですか。十年、百年、千年先の私たちの子孫が、健康で元気にすごせるように。

その明るい未来を作ることができるのは、現代に生きている私たちなのです。私はそのことを周りの人たちに伝えていきたいです。千年先でもキレイな水があることを願って。

# 入選

## 命の水

香川県　綾川町立綾南中学校
三年　竹内　沙織

「田んぼに水を入れてくるよ。」

父が田んぼへと出かけて行きます。今の時期は、家の前の用水路にいつもきれいな水が流れています。この豊かな水の恵みを受けて稲はすくすくと成長し、もう稲穂が見られるようになっています。風に揺れる緑の稲、黄色く実った穂が垂れる稲、こんな田んぼの風景を見るのが私はとても好きです。

私の住む綾川町には、その名の通り「綾川」が流れています。通学の途中で、毎日のように綾川の流れを見ています。祖母の話によれば、昔の綾川は今よりもさらにきれいな水で、アユやうなぎ、アカマツなどの生き物がたくさんいたそうです。その綾川の上流には長柄ダムがあり、綾川町の農業用水、生活用水となって、その水は私たちの命を支えてくれています。香川県が水不足に陥った時も、綾川町は一度も断水をせず生活することができました。水は作物や植物や人間など、すべての生き物に命を与え、多くの恵みをもたらしてくれます。

私たちの命を支えてくれる水。水がなければ私たちは生きていくことができません。水道の蛇口をひねれば、当たり前のように出てくる、とてもきれいな水。その水は、飲み水、食事のための水、お風呂や洗濯の水となり、あらゆる面で私たちの生活を支えてくれています。それなのに、毎日の生活の中で水に感謝することなく、無限にあるかのように使い続けています。当たり前のように出てくる水が当たり前ではないことを、私たちは認識しなければならないと思います。水はタダのように思ってしまいがちだけど、上下水道の設備には多くの費用がかかっていることも考えなければいけません。外国では、水を得るために苦労をして井戸を掘ったり、何キロも歩いて水を運んだりしているのをテレビで見たことがあります。私たちは水に感謝して、その使い方について、もっと考えるべきだと思います。

私の家では、野菜などの作物にやる水は井戸水を利用しています。それから、お米のとぎ水を花にやったり、お風呂の残り湯を洗濯に使ったりしています。もちろん、洗顔や歯磨きをする時は節水を心がけています。私が通っていた小学校では、給食の後、食器をティッシュで拭き、洗う水の節水をしようと全校で取り組んでいました。それに汚れた水を流せば、その浄化に多くのきれいな水が必要になるからです。このように、私たち一人一人が工夫して、節水を意識して水を使うことが大切ではないでしょうか。

そんな命の水ですが、時には私たちの命を脅かすこともあります。大雨で川が氾濫したり、地震による津波が起こったり、水の力は恐ろしいものです。数年前、綾川町も大雨のために綾川が決壊して、床下・床上浸水の被害を受けたことがありました。稲刈りの後の田も水につかってしまい、わらが散乱して大変でした。水が引いた後も、いろんな物が混ざって不衛生だったため消毒が行われました。普段の生活を回復するにはかなりの時間がかかったそうです。自然の力は、私たち人間には計り知れないほど大きいと実感しました。

そんな水害があっても、毎年のように水不足に悩まされる香川県は、「四国のいのち」と言われる早明浦ダムに助けられています。早明浦ダムからの香川用水に全面的に頼っている地域もあります。私が見た早明浦ダムは圧倒されるほどの水をたたえ、水を供給するだけでなく、発電という働きもしていました。早明浦ダムも長柄ダムも森林からの恵みの水を集め、私たちの命や生活を支えてくれているのです。豊かな自然が与えてくれる「命の水」のありがたさに感謝して、自然と共存しながら水を大切にしていきたいと思います。今年も、おいしいお米が実ることを願いながら。

入選

# 水への感謝をもって

高知県　高知学芸中学校
二年　山本　麻由

「水」それは私たちの日常生活において当たり前の様に存在している。水道の蛇口をひねればいくらでも流れ出る。日本では当たり前の光景だ。私たちが住む高知県は、山や川、そして海に囲まれた自然豊かな地形かつ、雨量も多いので、いつでもおいしい水にありつける。よって、水に関しての不便や苦労などについての経験がない。こうして、あって当然のごとく存在している水に対し、“感謝”という気持ちすら実感していないのではないか。かくいう私もその一人ではあるが・・・。

だが、考えてもみてほしい。全ての人々がこうした現状を維持できているわけではないという事を。

現在、世界では約八十カ国が水不足の問題を抱えており、十億人以上もの人々が安全な水を飲めず、そのうち毎年一千万人以上もの人々が、その汚水が原因となり命を落としてしまうという。

水は命の恩恵だ。私たちは生きていく上で水がなければ死と直結してしまうものだからだ。まず、私たち人間の体の大部分が水でできており、たえず口から入ってくる水を通し、血管を通り全身の細胞にくまなく運ばれることで健康や成長を促している。又、私たちの食する食料に至っても、植物や動物はじめ、水なしでは育たないだろう。生活する上でもお風呂や洗濯、トイレに至るまで全て水なしでは成し得ない。

それなのに、私たちはこの当たり前の日常に、未来への危機感すら抱かない。

昨年夏、家の付近で、下水道処理工事のため時間指定の断水が行われた。私たちは、なるべく外出したりする等して、家にいないよう努めた。が、時間内に外出先から戻り、断水なのも忘れて思わず手を洗おうとしたら、もちろん水はでるはずもない。トイレにも入れない。「んー、なんで。」と思わず心の中でつぶやきながらも、ただただ時間がくるのを待ちわびた。そして、水が使える様になり、「あー、よかった。」という軽い気持ちで、また何事もなく日常生活に戻れた。

だが、仮にこれからずっと続く生活を考えてみたら・・・。今の日常生活は当然できるはずもない。そう考えると、やはり私たちは恵まれた環境の中で生きてこられた事に感謝しなければいけないのではないだろうか。だからこそ、もっと水の大切さを意識しようと改めて思った。

節水―もちろんとても大切な事だ。何気なく行う水の出しっぱなしや使いすぎには、注意を払うのはもちろんだが、それ以外にも、無駄な廃棄をなくす努力も忘れてはならない。例えば、みそ汁おわん一杯分で、風呂桶四杯分の水が必要といわれる様に、生活排水を浄化するための水がそれ以上に必要とされるからだ。この悪循環を少しでも良好にする上で、節水以上に、無駄をなくす努力は意識を持って気をつけなければならない。

水―あって当たり前のものではない。将来世界人口は年々増加し、それに伴い食料危機や水不足問題を抱えていくことになる。その上、環境問題も加わる中で、安心、安全に暮らしていける人々が減少していかない様、まず、今できることの意識変化を、私たち一人一人が改めていかなくてはならないだろう。古来より、水を使い生活してこられた、この自然に対し感謝する“水に感謝する”という思いを、たえず持ち続けていきながら、明日のすばらしい未来へとつなげていきたい。

入選

# 胸を張って言える日まで

福岡県　福岡教育大学附属久留米中学校
二年　河口　綾華

私は福岡県柳川市に住んでいます。柳川市は『水郷の町』と呼ばれていて、その名の通り水に接する機会が多い町です。川下りが有名で、至る所に掘割が張り巡らされています。それに私の家の前にも堀があり、近くには沖ノ端川や二ッ川といった川があるので幼いときから水と触れ合ってきました。

小学生の頃、学校のすぐ近くにある二ッ川という川を探索したことがあります。その川はあまり有名ではありませんが、とてもきれいで、絶滅しかけている『オヤニラミ』という魚なども多数いるといわれている川です。実際に見てみると本当に川が透き通っていて魚が泳いでいる事が川の上からでもよく分かります。昔から地域の人達が川を汚さないように工夫していたそうです。

その話を聞いて私は心に引っ掛かるものがありました。私は小さい頃から牛乳が大嫌いで、小学校の給食に出ていた牛乳も半分は頑張って飲んで半分は捨てていました。いつも捨てるとき、牛乳に申し訳ない気持ちやもったいない気持ちもありましたが、嫌いだからしょうがないよねと思いながら捨てていました。

ある時、インターネットを立ち上げたら、『処分するのにお風呂何杯分？』という見出しがあったので、クリックしてみると『あなたも環境破壊者』と出てきました。そこには「魚が住める水質になるのに必要な水の量はお風呂（30 l）何杯分？」とあり、みそ汁（お碗1杯）は2.5杯、牛乳（コップ1杯）は13杯、天ぷら油（500 ml）は560杯、マヨネーズ（大さじ1杯）は13杯と書いてありびっくりしました。最後には『残さないで食べただけで水はきれいなままです。』とありました。私は二ッ川の近くの地域の人達がしていた工夫はこれではないのかなと思いました。食べ物等を大事にすると川もきれいにできる、川をきれいにすることは水も大事にできる、全てがつながっているのだなと感じました。それから私も日々努力し牛乳を全て飲めるようになりました。少なくとも、前よりお風呂13杯の水は大事にできるようになったわけです。

みなさんは水の大切さに気付いていますか。今の時代、日本では蛇口をひねれば簡単に水が出てきます。しかし、こんなに科学が進歩しているのにまだ蛇口をひねっても水が出てこない、ろ過しないと飲めない国もたくさんあります。私達は遠くまで水をもらいに歩かなくていいし、きれいな水の取り合いで争わなくてもいいのです。たった蛇口をひねるだけできれいな水が出てくるということは本当に幸せなことだと思います。特に柳川は周りに水がたくさんあって恵まれている環境です。

でも私達は本当に水を大切にできているでしょうか。遠くまで水をもらいに歩いている人より大切にできているでしょうか。

私はそうは思いません。苦労して手に入れた人は、水を貴重で高価な物のように大事に扱います。それに比べて私達は歯磨きのとき水を出しっぱなしにしたり、蛇口をきちんと閉めないでポトポトと水を出しっぱなしにしていたりと大事にしているとはとても言えません。

これからはこれらのことを常に意識し、更に水への意識を高め、また周りの人達にも節水の呼びかけをしていこうと思います。いつか胸を張って「私達は水を大事に出来ている」と言える日まで。

入選

# ふるさとの水を想う

佐賀県　学校法人松尾学園　弘学館中学校
一年　眞崎　由梨佳

小学四年生の夏、私は佐賀の水の旅をたどる「ふるさとの川と水、豊かなめぐみを訪ねて」学習体験ツアーというイベントに参加したことがある。ＮＰＯ法人みなくるＳＡＧＡが企画したものだ。

まず、富士町の通天寺の裏山水源を見学した。チョロチョロと岩の間からしみ出す水。あたりは水ばかりの山の中から水の旅路はスタートするのだ。水はサワガニが住むほどきれいでふりそそぐせみしぐれとともにあの光景は今でも思い出される。その後、私たちは、成富兵庫茂安が治水に力を注いだ石井樋や、大和町の水ものがたり館を見学した。山のわき水も佐賀市内では多布施川となって流れていくのだ。佐賀市は多布施川を水源としている。多布施川は今から約四〇〇年前に佐賀の「治水の神様」と言われた成富兵庫茂安によって作られた、人工の河川であり、現在も佐賀市の上下水道や用水の重要な水源として、利用され親しまれているらしい。私の家の窓からも多布施川が見える。いつもおだやかな水をたたえ、桜の季節にはその美しさは格別だ。桜の花びらをうかべた川の水はどこまで流れていくのだろうと幼い頃は思ったものである。

イベントでは川の流れにそって、さらに、市内を南へと進み、やがて筑後川へとやってきた。筑後川は、本当に大きくゆったりと穏やかな水が流れる川だ。向こう岸まではずいぶん遠く、近所の多布施川に慣れ親しんでいた私には、川というより海のようにも思えた。その後私たちは、遊覧船に乗り、昇開橋の下をくぐって、有明海を眺めた。あの山で生まれた水が市内の川を通り、どんどん大きな川を通って海へと流れていくのをともに旅して、水の存在感を実感した。水道の蛇口をひねると水がでてくるのは何の不思議もなく、水は蛇口の中から出てくるような錯覚さえしてしまうほど私にとってはあたりまえになっていたけれど、山から生まれ海へと流れる水の旅を経験し、水のありがたさを知ることができた。自然の偉大な力によって、私たち人間は生かされているのだと思う。「節水」と口先だけで言うのではなく一滴の水にも、命を感じて大切に扱う必要があると思う。

イベントに参加してからというもの私は佐賀の水のことがずっと気にかかっていた。とはいっても、何かをするわけでもなく、友達と遊びにいくとき多布施川沿いの道を自転車で通りながら、水面がキラキラと輝いているのを見たり、栄の国まつりの時、水道局の人からもらった「すいとっと」というペットボトル入りの佐賀の水が、おいしかったりとかそれだけで妙な安心感をもっていただけだった。

そこで、今回、インターネットで佐賀の水のことを調べてみると次のような記事を見つけた。それは、佐賀県が未利用水での発電を二〇一四年内に運用目指すというものだった。佐賀県は未活用の水のエネルギーを発電に利用することで、水資源の有効活用をするらしい。これの具体的な取り組みは二つある。一つ目は県内の水関連施設へ発電装置設置を目指すことである。もうひとつは県内ダムの活用だ。下流の水量を保つ目的で流す維持放流水を使う。ダム下部に発電施設を設けて、ダム維持管理用に発電するらしい。

佐賀の水資源が水エネルギーとして有効活用されることは本当にすばらしいことだと思う。私はまだ中学生になったばかりで身近なことしかわからない。佐賀の水は豊かできれいだけど、もっと広く目を向ければ、全てがそうだとは限らないだろう。世界中では、水不足に苦しみ、安心して水を飲めない国もあると思う。私に今できることはきれいな水を安心して飲めることに感謝し、佐賀の水を大切にすることだ。そして、水に関するいろいろなことに関心を持ち、視野を広げていきたいと思う。

入選

# きれいな水の大切さ

長崎県　壱岐市立芦辺中学校
三年　中尾　雅美

「でけんねぇ～。こえんしち。」

これは私が父と出かけると、必ず父が小さな川を見て言う言葉です。私が住んでいる島の方言で、「いけないね。こんな風にして。」という意味になります。父がこう言う理由は、今、島の川や水路がどんどんコンクリートで固められているからだと思います。

私の住んでいる壱岐市には「壱岐ホタルマップ」というものがあります。これはホタルを見ることができる場所を地図にして表した物です。ホタルは水のきれいなところにしか住みません。つまり壱岐は、水のきれいな場所がたくさんあるということです。しかし、最近壱岐では、年々ホタルが少なくなっていることが問題になっています。その原因の一つとして、コンクリートで固められた川が増えたことが考えられます。私たち人間が、ホタルが住めないような環境、水が汚い川をつくっているとは、とても恥ずかしい事だと思います。

私は、川をコンクリートで固めるメリットを調べていたところ、とても素晴らしい取り組みを見つけました。それは、二十数年前に奈良の川で行われた取り組みでした。その川は、昔は水質がよく、飲料水や農業用水として使われていたのですが、都市発展や上水路が原因で、コンクリートで固められ、臭くて汚い川になってしまったそうです。しかし、川を元のきれいな状態に戻そうとした集団が、コンクリートの護岸ではなく植物で作った岸でも良いことに気がつき、コンクリートを全て剥がし、自然を回復させ、元のきれいな川を取り戻したそうです。私は、これを見て、川は回復させることができる、川を大切にしている人がいると、とても感動しました。

また、調べていく内にコンクリートの川でも、人が手を加えて自然に近い状態のきれいな川にすれば、ホタルが戻ってくることも分かりました。壱岐はまだ、きれいな水が取り戻せる状態にあります。ホタルが住めるような、きれいな川を取り戻すことは、これからの壱岐を担う、私たちが取り組んでいかなければならない、大きな問題だと感じました。

きれいな水が流れる、きれいな川。これは、コンクリートで固められた川が増える中で、私たちが意識しなければならない、大切なことだと思います。生活排水がそのまま川へ流されるようなことはあってはいけません。

ホタルがきれいな水を必要とするように、私たち人間もきれいな水を必要とします。しかし、水は有限資源です。「節水」という言葉は、毎年耳にしますが、果たしてどれほどの人が、節水を意識して生活しているのでしょうか。歯を磨くときの水、顔を洗うときの水、家事をするときの水、庭に撒く水…。水は私たちの生活に深く関わっている大切な物です。雨水も有効活用できます。意識するだけでも、水は節約できるのです。

私は、この作文を書くことで、改めて水の大切さを実感しました。今までも水は大切に使ってきたつもりでしたが、もっともっと大切に使うことができそうです。水が豊かな土地に生まれたことで、普段の生活で水に困ることはありませんでしたが、発展途上国などの水資源が乏しい国では、何キロも歩かないと水源がないそうです。水を使いたいときに使える私たちは、とても幸せだと思います。

私はこれからも、きれいな水のありがたさを感じ、今何をするべきなのかを考えて行動していきたいと思います。

入選

# 我が家の節水デー

宮崎県　宮崎県立宮崎西高等学校附属中学校
三年　川西　由莉

「今、宮崎は、深刻な水不足に陥っています。」

昨年の春ごろ、私はあるニュースの特集をテレビで見た。内容は「宮崎の水不足」についてだった。なんとなく宮崎と水不足は無関係だと思っていた私にとって、それは衝撃のニュースだった。気になったので、詳しく調べてみることにした。

昨年の降水量は、県内全域で、平年の二分の一、またはそれ以下しかなかったようだ。ダムの貯水量はゼロパーセントになっているところもあり、発電を停止した状態であった。そのダムの写真は、私の想像していたものを上回るものであった。また、農業にも影響が出始めていた。田植えが進まなかったり、苗が水不足で枯れ始めたりしていて、農業が盛んな宮崎にとって、大きな打撃となった。

「農家の方は、来る日も来る日も雨が降るのを待ち望んでいます。」

ニュースでこの言葉を聞き、とても心配になった。また、産業や県民の生活にも影響は出ていて、一部の地域では断水をしていた。

もし、水が使えなくなったら――。その影響は、はかりしれない。考えてみれば、私にも数日間、水が使えなくなった経験がある。私が小学生の頃、台風十四号の被害で、宮崎市が断水した。今まで見たこともない自衛隊の給水車がやって来て、とても驚いた。父と一緒に長い列に並んで、水をもらいに行ったことを今でもよく覚えている。水道の蛇口をひねったら、水が出る。普段、当たり前にできることができなくて、とても不便だと感じた。

私たちが宮崎の水不足解消のためにできることは何か。それは、「節水」である。

「我が家の節水デーをつくろうよ。」

いきなり毎日心がけるのは難しいと思ったので、母の提案で、一週間に一日、節水デーをつくることにした。節水デーとは、その日一日は、徹底的に節水するという日だ。我が家の節水デーは、家族みんながそろう、日曜日に設定した。

水道の水を使わない時は、必ずこまめに止める。お風呂の残り湯を活用する。節水デーには、そういう簡単なことを徹底的にやっていった。特に、お風呂の残り湯は、洗濯に利用する水や花の水やりなど、使い道がたくさんあった。その使い道を考えるのも楽しみの一つだった。

「少しずつでも、続けていけば、必ず意味のあるものになる。」

私は、節水を通して、たくさんのことを学ぶことができた。

しかし、水はただ必要というわけではない。去年の三月、東日本大震災が発生した。その時、東北地方を襲った津波は、人々の大切なものを一瞬で奪っていった。水には、そういう恐ろしい力もあるということを私たちは忘れてはならない。

水に関して、私が思う大切なことは二つある。

一つは、水に関して正しい知識と情報を得ておくことだ。自分で勝手な判断をするのではなく、自ら進んで調べることが大切だ。そして、もう一つは、自分たちができること、「節水」を続けていくことである。一人が少しだけ実践しても、効果があるとは言えないかもしれない。しかし、その一人一人の小さな努力が積み重なると、必ず大きな意味のあるものが生まれると思う。

今、当たり前に水が使えることに感謝し、これからも大切に使っていきたい。

入選

# 守るべき大切なもの

沖縄県　宮古島市立砂川中学校
三年　源河　実乃里

窓から見えるサトウキビ畑。雨の降らない日が続くと、スプリンクラーが放物線を描き、太陽に反射してきらきらと輝きます。また、二月の製糖期になると、学校の近くの製糖工場から甘い匂いが届いてきます。私の暮らしている宮古島では、見慣れた光景です。しかし、この見慣れたふるさとの姿に「水」の力が隠れていることに、気がついていない人もいるのではないかと思います。

私が通っている中学校には農園があり、学期ごとに、きゅうりやとうがん、じゃがいもなど、いろいろな種類の野菜を育てています。地下水が利用されていて、畑のすぐそばの水道から、かん水をすることができ、とても助かっています。水かけを忘れて枯らしてしまいそうになったこともあり、野菜を育てることの難しさを知ることができました。また、毎日水かけをすると、一日で見ちがえるほど大きく生長する野菜に驚くと同時に、水の大切さを知り、以前より水に感謝し、地域と水の関わりについて考えてみようと思うようになりました。

宮古島は、川や湖がありません。島全体はサンゴ礁が元となる、琉球石灰岩で、水が浸透しやすく、地下水のほとんどは利用されないまま海へ流れていたので、昔の人々は、雨水をためたり、湧き水のある場所まで、何度も水くみへ行ったりと、苦労が多かったそうです。その水を効率よく使うために地下ダムが作られました。そして、地下ダムに蓄えられた水は、ファームポンドという、大きな貯水タンクに運ばれ、宮古島の様々な地域に配水されるようになりました。私の祖父母も、農業をしているのですが、昔はすべて天気次第で、雨がよく降る年と降らない年で、作物のできが違ったり、ハウス栽培も難しかったそうです。しかし、地下ダムができてから、葉たばこやさとうきびだけでなく、マンゴーなど、大きく広がったといいます。昨年、私たちの学年は、ファームポンドの見学と清掃に行きました。高さ十メートル、直径六十メートルもある大きなファームポンドの二杯分を一日で使うということを、係の方から聞いてとても驚きました。ファームポンドの上から見えた、どこまでもひろがる葉たばこやさとうきびの畑を見て、水と農業の関わりについて改めて考え、この風景を守らなければならないと思いました。

また、学校の近くにある製糖工場も、水と関わっていることが分かりました。以前、製糖工場の誘致に関わった、地域の先輩である方の講話を聞く機会がありました。約五十年前、大きな工場には、豊富な水が必要だったこと、敷地内の小さな井戸を、百日近くも人力で、数多くの人と協力して掘ったことを聞いて、ここでもやはり、水を得るために努力した先人の、大きな苦労を知ることができました。また、このことから、私たちの地域に地下水がたくさんあることが分かり、地下ダム建設につながっていったそうです。

今、私たちは水に恵まれた環境の中で暮らしています。生活の中に限らず、農作物や動物も水で育ち、その命をもらい私たちは生きています。そして、農業をはじめとする地域の発展にも、水の力があったことを実感することができました。私たちは、水に支えられて生活しているのです。そして、その水を得るために、努力してきた大勢の人々の姿を、私たちは忘れてはいけないと思います。

大切な水を守るには、どうしたら良いでしょうか。自分さえ良ければいいと思うのではなく、地域の一人、日本の一人、地球の一人として、水についての意識を高めていくことだと思います。それが、きっと大きな力となっていくと思います。地球上をめぐる水は、命と暮らしを支えています。このことを忘れず、私は、小さな努力を続け、大切な水を未来へと受け継いでいきたいと思います。

入選

# 水の都杭州を目指して

中国　杭州日本人学校
一年　小川　哲史

ぼくが今住んでいる中国杭州は長江三角州と呼ばれる南端にあり、水が豊かな場所だ。

旅行で中国各地を訪れたが、砂ばくのある敦煌や新疆ウイグル自治区をはじめ、北京、西安など内陸部はどこもかんそうしていた印象が強い。だから、帰りの飛行機で空から杭州をながめると、緑が多く、つくづく水に恵まれた地域だなあと実感することができる。

しかし、残念なことに日本から杭州に帰って来ると、杭州の水のよごれが気になる。日本の川はすき通っていて、普通に底まで見えるが、杭州の川は茶色か緑色ににごっていて底が見えない。今住んでいるアパートの近所の運河は両岸の遊歩道が整備され、杭州市民のいこいの場となっている。しかし、一番大事な要素であるはずの水がきたない。まるで「どぶ川」のようだ。

けれども、父や母が子供だった頃は日本にもどぶ川がそこらじゅうにあったらしい。では、なぜ今の日本の川はきれいになったのだろうか。ぼくはそのことについて調べてみた。

まず第一に、日本では下水処理施設が普及して来ている。ただ、その歴史はまだ浅く、つい三十年ほど前から整備が進み始めたそうだ。日本下水道協会の資料によると、日本の下水道普及率は全国平均七十五・一％、東京では九十九・二％、人口の少ない市町村では四十六・三％ほど。これは先進諸国の中ではおくれているそうなので、さらなる整備が必要だ。一方、中国の下水道普及率は大都市部では六十％以上だが、中小都市では二十％程度、農村部ではわずか二～三％ほどだ。

第二に、人々の意識や生活様式の変化により水がきれいになったと考えられる。例えば、ゴミの分別収集が一般的になり、ゴミを川などに勝手に捨てる人が減ったこと、それから、水をきれいに使おうという意識が高まり、油よごれのひどい食器はまずいらなくなった布などでふいてから洗ったり、洗う時には洗ざいを使い過ぎないようになったことも川などがきれいになったことと関係があると思う。

第三に、毎年のような夏の水不足や、阪神淡路や東日本大震災の教訓として、節水への意識が高まり、水は有限な資源だから、大切に使おうと考える人がきっと増えたのだと思う。ふだんじゃ口をひねれば水が出てくるので、有限ということは意識しづらいが、川や湖、水源地のダムをイメージすることも必要だと思う。

日本がたどってきた水への取り組みを念頭に置き、これから中国でやってみたら良いと思うことは、下水処理施設を普及させるということと、ゴミを川に捨てないなど人々の意識を変えることだ。しかし、中国は日本と比べ、国土が広い上に、人口も多いので下水処理施設を普及させるのは大変だし、まだまだ時間がかかるだろう。むしろ、川や池、湖の水をきれいにするために大切なことは、「川などにゴミを捨てない」「水をよごさない工夫をする」ということを意識することだ。この意味で日本と中国はもっと交流を深め、お互いの知恵を出し合い協力して水資源、環境保護のために努力を続けていけるといいと思う。

かつて、「上有天堂下有蘇杭」（天には極楽があり、地には蘇州と杭州がある）と言われ、美しい都として名高かった杭州。その川や運河の水がすき通るようになり、景観そして一番大切である水質も美しい杭州になることを期待したい。